

青のなかへ

相馬 久康

濃青色に連なる丹沢の山並みを背に
今年も若い君たちを迎える新たな季節の到来だ

青の清冽

青の不安

インス・ブラウエ
ins Blaue 「青のなかへ」

散り残る多摩の桜に頬を染めて

自らを語る君たちの含羞みと矜持の言葉に耳を澄ましなが

ins Blaue 本来は「あてどない旅へ」を意味するドイツ語の成句を
私は反芻する

立ちほだかる分厚い閉塞の壁の前に

なおかつ内なる促しの実現をめざす若者たちの思い ins Blaue

幕末の時代に生を享け

向学の思いをやがて大学の創設に託した創立者たちこのかた

一世紀を貫いて受け継がれ続けた「青のなかへ」の旅 ins Blaue

三十年前の「大学紛争」の頃

雑誌『朝日ジャーナル』の大学紹介シリーズの中に

「中央大学 執念の道」と書かれてもいた

このins Blaueの道のことを

今は亡き仏文出の親友の語ってくれた 「パリ・ソルボンヌのた
たずまいさながら」の神田・駿河台校舎での出会いに始まり
豊かな緑に包まれた白亜の多摩校舎での二十余年このかたの出会い
に至る
これら夥しい数の出会いを重ねてやがては四十年を迎えようとする
私のうちにも
かつてこの学び舎に集うた若者たちの辿る様々な ins Blaue の道は
連なり続けている

新しい若い君たちに言おう
君たちの前にあるのは だから
日本の近・現代史に自らの刻印を与えながら
いままた新たな世紀に向かおうとしている
この晴れがましい「青のなかへ」の歷程なのだ

その君たちのなかを
かつての沢山の青春と一緒に歩いている



相馬久康（法学部教授）